

# アメリカニズムと神話形成

福田 立明

## 非在の処女地

だがアメリカ人の生きかたと性格についても、とも持続的な概括のしかたのひとつは、私たちの社会が、アリゲニー山脈の峠を抜け、ミシシッピの谷を横切り、西部の高原と山地を越えて、太平洋岸へと人びとを引き寄せる無人の大陸の誘引力によって形成された、という考えである。

——ヘンリー・ナツシュ・スミス

## 『処女地』（一九五〇年）

クリストファ・コロンプスによる一四九二年の「発見」以来、五百年に及ぶアメリカの歴史の最初の逆説は、それが本来ならば非在の陸地だったという点にある。インディオス、もしくはシバング島への航路を求めたエスパニアの探検者たちにとって、それはもともとあつてはならぬ陸地であつた。この荒くれ男たちを送り出したフェ

ルナンド王とイサベル女王に代表されるヨーロッパの夢を、それは邪魔だてするものとして存在したのである。第二のパラドックスは、「発見」されたのはけつして「新しい」大陸でもなければ、ナツシュ・スミスがいうように、「無人の大陸」でもなかつたことである。そこには『コロンプス航海誌』にあるように、黒くもなければ白くもない原住民が住んでおり、そもそもコロンプスに陸地の発見を確認させたのは、その航海日誌の要約者バルトロメー・デ・ラス・カサス神父の注釈によれば、サンタ・マリア号の船尾のやぐらから望んだ火、たぶん夜間に用足しに出た住民が手にした棒切れの火だった、という（ラス・カサス三九四頁）。

では、初めからこのように人間臭い土地へ白い膚のヨーロッパ人が渡来したという出来事が、世界の歴史において、なぜ「無人」の「新大陸の発見」という虚構に仕立て上げられなければならなかつたか。それはひとこといえば、当時のキリスト教ヨーロッパ世界中心思想を抱く白人によるひとつの虚構的言説にはかならなかつた。既成の実在としてのユーラシア大陸にあらざる大陸は、すべからく「新」大陸なのであり、それが原住民のいる土地であつても、非キリスト教徒しかいないかぎり、

空白の「無人」の地にほかならなかつたのである。彼らにとつてすべての異教徒は教化すべき者であり、それ以前には人間的関係はほとんどなり立ちえなかつた。十五世紀末以来、膚の色と血と、そして宗教の異なる人びとがともに住むべく定められた土地でありながら、その歴史が二十世紀に入るまでただヨーロッパ渡来のキリスト教徒白人種の目と口を通してしか伝えられることがなかつたという点に、アメリカ合衆国という国の最大の特徴が認められる。

膚の色が黒くもなければ白くもないアメリカの住民たちは、その経験や歴史を近年になるまで世界に向かつて語ることはなかつた。彼らの声は、往時の西部劇の映画のなかで観衆の耳には訳のわからないむなし響きとして素通りするだけだつた。だが、もしも英語に訳されていたとしても、文化コードの共有を夢見ることもできぬふたつの言語のあいだで、意味のある移し替えがなされる余地はなかつたろう。彼らの宗教的、文化的なコンテクスト、伝達表現や生活の様式は、白人渡来者の理解を超えるものだつた。コロンブスが最初の上陸地バハマ諸島の小島の原住民に対して抱いた希望的期待が空しいものとわかつたとき以後、原住民は教化不能な野蛮人とし

て荒野に追い立てられるほかなかつた（『航海誌』一四九二年十月十一日）。地理上の誤解に基づきインディアンと命名されたアメリカ原住民は、ヨーロッパ・キリスト教世界が教化／「救済」に失敗する数多くない異教「蛮族」のひとつとなつたのである。

原住民と渡来征服者。それは神話・伝説形成期という時代限定を加えても、人類史上に幾多の実例がある。新大陸と同様に異なる民族の移動侵入の到達点になるブリテン島、アイルランド、アイスランド、日本の島々における伝承の豊かさ、また侵入の終着点にはならないものの、すでに高い先住民文化があつたエジプト、インド、ギリシアへの反復される侵入民族の波が生みだした神話体系を見れば、異文化衝突のエネルギーが一種の文化変容 (acculturation) のようなプロセスをもたらし、神話形成 (mythopoesis) に刺激を加えることを想定してもよいのかもしれない。

たとえば、キリスト教化による伝承資料散逸を免れたアイスランドで発見される『エッダ』のなかの英雄伝説には、汎ヨーロッパ的な民族大移動の余波が随所に認められるし、シユリーマンのトロイア遺跡発掘は、ホメロス叙事詩に古代ギリシアの民族移動戦争の歴史的記憶の

痕跡が残されていることを実証しているといつてよい。後者の神話伝承には、アカイア人の侵略戦争の口実として一女性の掠奪という民間説話的物語り機構の動きが加わるが、そもそもヘレネー自体がギリシア先住民の豊穡の女神と考えられるもの名だったのを(高津二五七頁)侵入者がその神話形成過程で半神の女性へと格下げしてしまったのだという指摘さえある(グリマル一六頁)。そうだとすれば、トロイア戦争とは、征服民族が持たない女性神格を求めて、彼らに追われた先住民の再定住先へと再追撃した戦いと考えていいかもしれない。それともそれだけ波状的な移動があつた歴史の記憶を映しているのかもしれない。大西洋に向けての新大陸の玄関口、ニューヨークの港に巨大な「自由の女神」像を造つた植民地征服者たちは、やはり古代ギリシア先住民の女神と想定されるアルテミス女神像を建立した征服者のしたようには先住民インディアンの女神を同化することはできなかつた。アメリカ文学の読者として私たちは、せめてそのミュトス(物語)的テクストのうちに、原住民の神格を一女性形像の姿でさえ窺い見ることはないのであらうか。

アメリカ大陸植民史においても、異文化衝突の軌轍が

なかつたわけではない。それでも「神話」は生まれなかつた。考えられる理由はいくつもある。いわく、グーテンベルク以後は神話形成期とはなりえない。創造的で、ときにはあい矛盾するような豊かな伝承をも生みだす神話形成機構が機能するためには、長期の口承伝統の期間を要すること。ミュトスの生成力のダイナミズムは、活字に定着されたとんに死滅するのだと。またいわく、植民者には「イギリス人」という出稼ぎ者の意識しなかつた。それもときには幾世代もの長きにわたつて。たしかに、英語圏植民地はフランス系植民者が持つような「クレオール(Creole)」という語を持たなかつた。それは幾世代かを経ても、なおその土地に生まれた者(クレオール)という帰属意識の薄弱さを示すもので、神話形成を阻む心理状態を示唆するものなのかもしれない。あとひとつ挙げれば、原住民と渡来者とがたがいに「他者」として覇権を争わなければならなかつた例は歴史上数少なくないとはいへ、それでもこれほどまで歴史と地理上の断絶を経たまま多くの異民族同士の遭遇は、オセアニア植民を別にすればほとんど類例がなかつたこと。悲劇の直接的原因はたがいの物質文明を発達上の落差、もつとも単純化していえば、銃を持つか持たないか、の

差異にあったかのように見えるかもしれない。二十世紀の映像メディアは、銃を手にした白人がそれを持たない有色人種を撃ち倒しながら進んでいく無数の映像で、十六世紀以降のヨーロッパ列強の世界的植民地支配を視覚イメージ化してきた。それを直視するのに耐えることができるのはもちろん銃を持つ側に属する観客だけなのだが、撃鉄を引く指とつながりながら、その指の動きとは葛藤をしたかもしれない内面の意識をも読みこんだ映像にでくわすのは、ほとんど僥幸といつてよかつた。

たとえば、アフリカ西海岸をダカールから、かつての白人商人の欲望を写し出すかのように命名された象牙／黄金／奴隷海岸を経て旧コンゴ（ナイジェリア）へと至る奴隷狩りの道。ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ大陸を結んだ三角貿易の第二航路で積荷同様に運ばれた黒人奴隷、新大陸の第三の住人と定められた人びとの一父祖がクンタ・キンテとしていささかでも尊厳と懐古の念でたどられ映像化されるには、三百有余年の歳月を要した。なぜならば「処女地」をもとの原住民から収奪し、それを耕すアフリカ人奴隷を所有した者だけが支配的文化空間における言説機構を占有することができたからである。

こうして新しい複合民族としての「アメリカ人」の、基本的とはいえなくとも象徴的な人種構成と、その配置図式が形成される。その土地へ渡来した順にいえば、モンゴロイド系アメリカン・インディアン、コウケイジャン（白人種）系アメリカ人、ニグロイド系アフロ・アメリカン、だが人種的三要素は、このダイアグラムにおいて、おのおのが頂点をなす三角形をかたち作ることにはない。第一の原住民アメリカ人は、第二の渡来白人種アメリカ人が造り上げた植民地（とのちの合衆国）の境界線、絶えずフロンティアと呼ばれる辺境によってますます人住まぬ荒野へと押し出され、境界内社会の構成要素となることはなかつたし、第三のアフリカ系アメリカ人はいつも植民地（のちの国家）境界内に留め置かれながら、長年のあいだ奴隷（もしくは人種偏見の犠牲者）として、従属的關係にしかありえなかつたからである。空間において三点が結ばれないことは、幾何学的にはひとつの平面、二次元の広がりさえもが決定されないことを表す。レッドスキン、ペイルフェイス、ニグロという豊かな色彩的象徴性をおびたアメリカが、独立時の十三州とナッシュ・スミスの「無人の大陸の誘引力」が増加させた州の現在数を表象する星条旗をしか国旗として持たないの

は、いかにそれが白人中心意識で構成されたかを示している。

三つの人種的構成要素は、二十世紀後半の「サラダ・ボウル」の比喩表象によるアメリカ多元文化主義社会において対等な固有性を持ちはじめるが、かつての「メルティング・ポット」アメリカにあつても、字義通りの「人種のるつぼ」、つまり混血という融合現象によつてその表象性を保持しつづけた。二十世紀モダニズムの南部白人作家ウィリアム・フォークナーが、白人少年主人公の荒野とそこで狩猟の導師として造形したサム・ファーズの容姿を想像しよう。彼の父親はチッカソウ族の酋長、母親はクアドルーン（四分の一だけ黒人の血を受けた混血）。したがつて血の組成からいえば、インディア人が二分の一、白人が八分の三、黒人が八分の一という、比喩的には赤・白・黒の「血の三位一体者」、いわば可能性としてあるべき真のアメリカ合衆国の換喩的エンブレムをなす。南部白人作家という支配者側の小説テキストで、どこにこれほどまでにアメリカニズムの濃厚な人物造型がなされる必然性があつたのか。詳細には別のところで論じたが（「死者の音信」一八九—九二頁）、ここには民族移動の新征服者側における神話形成の一例

が認められる。

それにしても、いまいちど、アメリカは神話を持たないのか。

### アメリカニズム

この話はずっとアメリカ独自の英語用法を意味するものだったが、やがてアメリカ人の心的態度、性格、習慣や、その国民文化に特有な原理・慣例を指すようになり、さらには合衆国とその民主主義伝統や理念への愛着や忠誠をも意味するようになった。現時点から歴史的に振り返つて広義のアメリカニズムは、「アメリカ人」や国家の発生以前にもさかのぼつてたどられよう。そもそもヴァージニア会社によるジェイムズタウン植民（一六〇七年）の試練の生活自体が、また「巡礼始祖（“Pilgrim Fathers”）」たちの「メイフラワー誓約（“Mayflower Compact”）」（一六二〇年）の理念自体が、その発露の起点といえる。そしてジェイムズタウン植民に加つたキャプテン・ジョン・スミスの『ヴァージニアに起きた注目すべき出来事の実話』（一六〇八年）を初めとする英本国への探検・植民地事情紹介書は、旧世界の、イギリスの、いわば「辺境体験記（“Frontier

narrative:」であった。キャプテン・スミスはのちに『ヴァージニア、ニュー・イングランド、サマー諸島の由来概要』（一六二四年）で、インディアンによるみずからの囚われびと体験と王（酋長）の娘ボカホントスによる救済の体験を物語る。これは「インディアン捕囚体験記（“Indian captivity narrative”）」というすぐれてアメリカ伝統的な物語言説の先駆をなすものとなった。

このようにアメリカニズムという語は、世界の他地域、ことに旧大陸との対比においてアメリカの文化的独自性や諸現象を考察するとき、さまざまな含意を持つ「アメリカ性」を指示する語として使われることになる。この語の外延が画定し難いという意味において定義づけも断念せざるをえないが、ここではおもにアメリカ文化テクストにおけるアメリカン・ナラティブ（説話的物語）の要素や、文化批評におけるアメリカ性志向などと、この用語との関わりを念頭に置いて、論を進めてみたい。

たとえば、合衆国は神話を持たない、というのも、ひとつのアメリカニズムの定言である。アボリジニーの伝承を除き、ギリシア・ローマ神話、テュートン・ゲルマン神話、ヘブライ・クリスチャン神話などのような「狭義の神話」を固有のものとして持つてはいない、という

条件を加えれば、それは正しい。アメリカ・インディアンの神話といっても、各部族が比較的孤立状態に散在していた原住民の伝承は、サム・ファーザーズの父祖のチッカソウ族のそれとオジブウェ族のそれとはまったく別のものであったろうし、アフリカからつれてこられた人たちの伝承も同様に、たとえばアシャンティ族とヨールバ族の神話とでは差異が大きかったことだろう。結局印欧語という共通祖語を持ち、民族移動によって異民族文化融合が比較的進んでいたヨーロッパ渡来の白人植民者たちの意識的共通項をなすキリスト教神話が神話形成の核心に据えられるのは、当然の成り行きであつたらう。しかし人びとの心の奥底で、神々は死なない。カール・G・ユンクは、幼児期の記憶素材への退行という夢の思考の特徴に注目して、神々の話（神話）が古代の人びとの現世的で集団的な空想・夢の反映であることを、フロイト、ニーチェなどを引きながら説明しているが（『変容の象徴』26-28）、「神話を作りだした時代は、現在なお夢が考えるのと同じ考えかたをしたのだ」（同上書88）とすると、詩的空想のうちに神話的空想の痕跡が言表されることもありえよう。したがって白人たちの物語に、ギリシア・ローマの、テュートン語族の古代異教の神々

が喚び起されるのはいうまでもなく、植民地生まれのクレオール、ことに混血クレオール文化の言説にマスコウギアン語族の神霊、あるいは西アフリカからマンデインゴ語族の神霊が依り憑いたとしてもさほど不思議ではない。

神話を持たないということが、かえって補償的に神話的思考を惹起するというパラドックス。すくなくとももつとも想像力の働きをこうむりやすい詩的、文学的デイスコースのなかに、神話形成性を帯びる種子が埋めこまれる。だが、ミュトポイエーシスの時代をはるか過ぎ、ロゴス的思考の抑圧の下から辛うじて芽を出すものであつてみれば、逆説の種子から生じる神話世界が、テュートン神話の聖なる世界樹 (Yggdrasil) とは似ても似つかぬ矮小なものとなつても致しかたない。アメリカというテクストをまえにして神話・原型批評を考えるのは、ある程度まで「疑似の (pseudo-)」という接頭辞がつく作業を覚悟することである。

もうひとつの顕著なアメリカニズムである多民族社会について。およそ複数の異民族集団からなる社会は、本来「メルティング・ポット」的機能をまったく失うといふことはないものである。たしかに過去においては、た

とえばアングロ・アメリカンが同一教会所属家庭どうしの婚姻を好ましいとする志向を持つことはあつたらうし、比較的最近までユダヤ系や日系のアメリカ人マイノリティ社会にも、人種的アイデンティティを維持しようとする根強い傾向があつたことも事実である。「純粹白人性 ("white homogeneity")」なる理念は、「異種族間混交 ("miscegenation")」の脅威に曝されることがもつとも多いと想像されるアメリカ南部の白人層のあいだで強く求められたことからわかるように、他のいづこにも増して多人種国家の合衆国で生きつづけることだろう。

ふたたびフォークナーの小説テクストから引用すれば、「やがてジム・ボンド (白人との混血黒人) のような人間が西半球を征服するだろうと思うよ。もちろんほかたちが生きているうちにといいのではないだろうし、その連中も南北の極地のほうへと広がっていくにつれて兎や鳥のように白っぽくなるだろうから、雪のなかでもことさら目立ちほしくないだろう。」カナダ出身の白人シユリーヴ・マツキヤノンの異種族間混交へのペシミズムは、「純粹白人性」神話のひとつの裏返しとして吐露される。「だから数千年もしないうちに、きみを見ている

このぼくだって、アフリカ人の王様の腰から飛び出してきたつていうことになるだろうよ」(『アブサロム・アブサロム』378括弧内論者)。

ほとんど全人種による共同国家化という人類史上最初の「熔鉱<sup>メルテイング</sup>炉<sup>ボット</sup>化実験」においては、絶対数とはかかわりなく、その人種グループの血統的純粋性の意識の度合いに応じてマイノリティ化することが避けられないことを、この比喩表現が表している。こうして数と権力の上ではまさる南部莊園社会支配層出身の白人作家の心のうちに、異種<sup>ミゼジネーション</sup>族間混交により薄められながらも、なお増大する「黒い血の海」に飲み込まれていく不安と絶望の影を投げかける。ここには「純粋白人性」の神話で支えらるる「アメリカのアダム」の無垢の喪失感という生理的なやりきれなさ、逆にそれへのこだわりから開放されることのない「白い自我意識」に向けられた自己嘲笑とが読み取られよう。ひとの意識にとつて、純粋と無垢の喪失はいつも悲しみである。変化と変身は恐怖である。

白人種の純粋な血の等質性が脅かされる植民地というあらたな環境で、危うい経路をたどり流れてきた血統を一族の父祖へとたどること、あるいは自己の子孫へと送りどけること。それが自己のアイデンティティの証と

なるアメリカで、ひとりの父祖を共有する一族 (Clan) の物語であるサーガがひとつの重要な小説サブジャンルになったのは、偶然でない。ナサニエル・ホーソーン『七破風の家』(一八五一年)を初めとするこの一族/家の小説では、家系の系譜作成という普遍的な神話形成メカニズムのひとつが作用する。フォークナーのサトペン家のサーガ(『アブサロム、アブサロム』一九三六年)やマッキヤスリン家のサーガ(『行け、モーセ』一九四二年)も、共通の父祖とその一族の家系を通してアメリカ深南部 (Deep South) の神話形成を試みた例である。筋立てだけから単純化していえば、前者の白人開拓者父祖トーマス・サトペンはいち島という混血クレオール文化とその混血的血筋を引く息子の拒絶において、後者の父祖ルーシアス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンは先住民の土地の収奪、異種族間混交と近親相姦の罪の記録を三代目継嗣アイザックに読み解かれ、彼を原住民集団のエートスへと回心的帰依させることによつて、結果的にともに純粋白人の血統を断絶させるに至る。両方の克蘭で生きながらえていくのは、さきのシユリーヴのペシミスティックな予想通りに、さまざまな比率で混じり合う混血系の子孫だけである。

「人種のるつぼ」状況にあつて、血の純粹性保持へのこだわりとその「汚染」への恐怖感が、いかに白人男性を近親相姦幻想へと追いやるかは、いくつものアメリカ小説が示す通りである。はるかポウのロデリック・アッシャーやメルヴィルのピエール・グレンディニングからフォークナーのクウェンティン・コンプスンへと、その近親相姦妄想とタナトス（死への本能）支配の様相をたどれば、私たちはアメリカ文学史のいわゆる「暗い文学伝統」（“The Dark Tradition”）の基層に、疑いなくひとつの神話原型があることを認めざるをえなくなる。

もとより近親愛の神話原型の起源は、旧世界に求められるべきものであろう。テーバイ王家のサーガの主人公オイディプスにさかのぼるまでもなく、トリスタン伝説に論及してドニ・ド・ルージュモンが書いたように、ヨーロッパには偉大な姦淫の神話がある。ジョイスとマルセル・プルーストにつぐ二十世紀後半期の一大長編小説『アレクサンドリア四部作』（一九六二年）の作者ローレンス・ダレルは、『死者の書』として当初構想されていたこの作品の執筆準備期にヘンリー・ミラーに宛てた手紙で、「軍隊が前進するまえに対戦車用塹壕の深さと形を設計するようにイギリス人のタブーについて短い

人類学的な勉強をしようと思います」（一九四四年八月二二日付、ウィックス198）と告げるかたわら、別便でメルヴィルの『ピエール』、あるいは曖昧さ（一八五二年）を一冊送つてくれるように依頼している（同年五月二三日ウィックス191）。ダレル『四部作』の読者は、その影響の結果としてイザベル、ピエール姉弟の關係が、アイルランドの霧雨のなか、凍りつく湖のあいだに建つ農家にただふたりきり取り残された孤児パースウォーデンと盲目の妹ライザの兄妹の哀しいエピソードとして反復されるばかりでなく、その「冬の国」<sup>ヒベルニア</sup>的近親相姦劇の陰画面上に、旧地中海世界の「人種のるつぼ」であり、近親相姦のプトレマイオス王朝の「世界都市」アレクサンドリアを舞台とする現代のロマネスク劇の陽画像が結ばれるのを知ることになる。十九世紀のアメリカニズムを表象する作中芸術家ピエールが、百年を経てアイルランド系詩人／外交官パースウォーデンとして「再現前」<sup>リプレゼンテ</sup>されるとき、イギリス英語がアメリカニズムを経て母国へと伝えられるように、ヨーロッパの神話は辺境植民地から取り戻されたのである。

人類の地球規模の移住拡大によるフロンティアの消滅にともない、いかなる文化も固有なるものとしてながら

えることはない。世界のあらゆる地で、ちょうどアメリカニズムが形成された状況下のように、「サラダ・ボウル」的多元主義と「るつぼ」的異文化融合主義のせめぎあいのうちに、否応なく文化変容が促されはじめているのである。より深く、より豊かな変容を遂げたものだけがグローバルな適応力を帯び、他文化圏にも受容される。ヨーロッパ音楽伝統と西アフリカ音楽伝統の新大陸における三世紀半にもわたる文化変容を経たアフロ・アメリカ文化のリズムとイデオム——ジャズが、世界をいかに制覇したか。二十世紀最大の拡大文化現象の震央に、強烈なアメリカニズムがあったのである。

### 参考引用文献

この文献の引証は本文中に括弧で著者名または書名略号と頁数（和書・日本語訳書は漢数字）により示した。

- Chase, Richard. *Quest for Myth*. 1949. New York: Greenwood Press, 1969.
- . *The American Novel and Its Tradition*. Garden City, N. Y.: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Durrell, Lawrence. *The Alexandria Quartet*. London: Faber and Faber, 1962.

- Faulkner, William C. *Absalom, Absalom!* 1936. New York: Random House/Modern Library, n. d.
- . *Go Down, Moses*. 1942. New York: Random House/Modern Library, n. d.
- . *The Sound and the Fury*. 1929. "Author's Appendix" and *As I Lay Dying*. New York: Random House/Modern Library, n. d.
- Grønbech, Vilhelm. *Nordiske Myter og Sagn*. 1927. København, 1965. 山崎静訳『北欧神話と伝説』新潮社 一九七一年。
- Grimar, Pierre. *La Mythologie Grecque*. Paris: Collection Que Sais-Je?, n. d. 高津春繁訳『ギリシム神話』白水社 一九五六年。
- Jung, Carl G. *Symbols of Transformation*. 1952. Trans. R. F. C. Hull. *The Basic Writings of C. G. Jung*. Ed. Violet Staub de Laszlo. New York: Random House/Modern Library, 1959. 同じ第四版に基づく日本語全訳は『野村美紀子訳『変容の象徴』筑摩書房一九八五年。
- Kupperman, Karen Ordahl. Ed. *Captain John Smith: A Select Edition of His Writings*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1988.
- Las Casas, Fray Bartolomé de. *Historia de las Indias*. Edición por Juan Pérez de Tudela Buoso. Madrid: Biblioteca de Autores Españoles, 1957-61. 長南 実訳『ラス・カサス インディアス史(一)』大航海時代叢書第Ⅱ期 21 岩波書店 一九八一年。
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. 1923.

- New York: Viking Press, 1964.
- Lerner, Max. *America as a Civilization*. 2 vols. 1957.  
New York: Simon and Schuster, 1964.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century*. 1955. Chicago and London: U of Chicago P/Phoenix Books, 1958.
- Melville, Herman. *Pierre, or The Ambiguities*. 1852. New York: Hendricks House, 1957.
- Miller, Perry. Ed. *The American Puritans: Their Prose and Poetry*. 1956. New York: Columbia UP, 1982.
- Murry, Henry A. Ed. *Myth and Mythmaking*. 1960.  
Boston: Beacon Press, 1968.
- Neckel, V. G., and H. Kuhn. Eds. *Edda*. Heidelberg, 1962.
- 谷口幸男訳 『エッダ——古代北欧歌謡集』 新潮社  
一九七三年。
- Rougemont, Denis de. *L'Amour et l'Occident*. Paris: Librairie Plon, 1939. 鈴木 健郎・川村克己訳 『愛のこころ——エロスマニアガム』 岩波書店 一九五九年。
- Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*. 1950. New York: Random House/Vintage, n. d.
- Vickers, John B. Ed. *Myth and the Literature: Contemporary Theory and Practice*. Lincoln, Neb.: U of Nebraska P, 1966.
- Wicks, George. Ed. *Lawrence Durrell and Henry Miller: A Private Correspondence*. New York: E. P. Dutton, 1964.
- Williams, William Carlos. *In the American Grain*. 1925.

- London: MacGibbon & Kee, 1966.
- Young, Philip. "The Mother of Us All: Pocahontas." *Three Bags Full: Essays in American Fiction*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1973. 175-203.
- 福田立明 「冥界への導入秘儀——Go Down, Moses論Ⅰ」 『富山大学人文学部紀要』 第二十号 一九九四年三月 二〇五—一八頁。
- 「死者の音信——Go Down, Moses論Ⅱ」 『富山大学人文学部紀要』 第二十二号 一九九五年三月 一八七—二〇七頁。
- 林屋永吉訳 『ロンプス航海誌』 岩波書店 一九七七年。
- Martin Fernandez de Navarrete, Carlos Sanz 著 複製  
の編纂者の校注本の翻訳。
- 高津春繁 『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 一九六〇年。
- 巽 孝之 「ニュー・アメリカニズム——米文学思想史の物語学」 青土社 一九九五年。